広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第57号　2008　371－378

S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究 Ⅳ

― オペラ作品との関わりを視点として　その２ ―

枝　川　一　也

（2008年10月２日受理）

A Study on S.Donaudy “36 Arie di stile antico” Ⅳ
― Regarding his operatic works no.2 ―

Kazuya Edagawa

Abstract: I have examined S. Donaudy's (1879-1925) “36 Arie di stile antico” from various perspectives to analyze the music and content, and shed light upon his unique style and musical phraseology. I find it deeply interesting that, although S. Donaudy has become widely known and received in Japan, his work has garnered little interest in Western countries; there is almost no research into historical documentation regarding his life or music. In that paper, I introduced the content of “SPERDUTI NEL BUIO” (1907), the fourth of S. Donaudy's six operatic works, which are already out of print. In this paper, a continuation of our previous one, I attempt to analyze more deeply this same opera. “morendo”, which Donaudy used impressively in his “36 Arie di stile antico”, is used frequently in this opera. This is especially seen in its use for the way of life of the main protagonists, Nunzio and Paolina, and the fateful scene of Duca Vallenza. It is extremely interesting how it was used in such a striking manner. Trying to surmise the intentions of the composer, and how these indications should be interpreted in regards to the performance of the opera are issues, I believe, that are better left entrusted to the individual performers.

Key words: S. Donaudy, 36 Arie di stile antico, opera
キーワード：S. ドナウディ，古典様式による36の歌曲集，オペラ

１．はじめに

筆者はこれまで，S.Donaudy（1879-1925）の36の歌曲集，“36 Arie di stile antico”（古典様式による36のアリア）の楽曲・内容分析を試みるために，様々な視点から考察を進めてきた。現段階までに Donaudy の楽譜上に細やかに書き記された多様な強弱，速度変化の指示，及び曲の色彩の変化を助言する発想標語について検討し，彼独特の作風，音楽語法を明らかにした。拙稿（2003）の資料１～資料３にまとめたとおり[1]，膨大な種類と数の発想標語は Donaudy の「言葉」として，曲の理解と表現について演奏者に指示を与えていた。それに対して拙稿（2001）でまとめたように[2]，イタリアオペラの隆盛期に生きた彼のロマンティックな楽想の根底には，師匠である G. Zuelli の強い影響力と，国家統一運動（Risorgimento）後のイタリア古典芸術に対する意識の高揚“stile antico”が表れているように思われる。

筆者は Donaudy の我が国における愛好家の広がりに対して，西洋諸国での関心が稀薄なこと，Donaudy に関する歴史的な文献資料，楽譜，詳しい先行研究がほとんどないことに研究の意義と必要性を感じている。演奏家の立場から，楽譜を手がかりに様々な角度から研究を進め，Donaudy の意図を紐解こうとしている。

S. Donaudy の声楽作品として，我が国では古典様式による歌曲集（全36曲）が出版されており[3]，その中の数曲は声楽家のレパートリーとして，しばしば演奏され，広く親しまれている。それに対して，彼がオペラ作曲家であったことはほとんど知られていないであろう。彼は生涯に６つのオペラを作曲した。第１作“Folchetto”（1892），第２作“Scampagnata”（1898），第３作“Theodor Koerner”（全４幕），第４作“Sperduti nel buio”（全３幕），第５作“Ramuntcho”（全３幕），そして第６作“La Fiamminga”（全１幕）である。

筆者はこの６作品のうち，第４作と第５作のスパルティート，及び第６作のリブレットを収集している。すでに絶版となっていることからも，非常に貴重な資料であると考えられる。いずれも脚本は弟の Alberto Donaudy（1880-1941）とされている。36の歌曲集のテキストは作詞者が明らかにされていなかったが，1998年にリコルディ社より出版された36の歌曲集の解説には，テキストが弟の Alberto であること，作曲の時期が1918年頃，出版年が1922年であることが記されていた[4]。このことからオペラ・声楽作品における Donaudy 兄弟の緊密な連携が認められる。36の歌曲集の作曲された1918年は，第４作“Sperduti nel buio”（1907）と第５作“Ramuntcho”（1921）の作曲時期の間にあたる。従ってこの２つのオペラについて考察を深めることは非常に意義深いことと考え，本稿では前稿（2007）[5]に引き続き，Donaudy の６つのオペラ作品のうち，第４作“SPERDUTI NEL BUIO”（1907）の内容分析をより深めることとする。

２．SPERDUTI NEL BUIO

《闇に紛れて》

音楽　ステファノ・ドナウディ
３幕劇台本　ロベルト・ブラッコ
歌劇脚本　アルベルト・ドナウディ

登場人物

パオリーナ	①②③	ソプラノ
ヌンツィオ	①②③	テノール
ヴァレンツァ公爵	②	バリトン
リヴィア・ブランハルト	②	メゾソプラノ
貴婦人コスタンツァ	③	メゾソプラノ
フランツ・カルディッロ	①	バリトン
エミリア	①	ソプラノ
ミローネ	①	バス
ロロッテ	②	ソプラノ
グイドルフィ	②	テノール
カッレーゼの声	③	ソプラノ
夜更かし者の一人	①	テノール
「ヌオーヴォ・エジツィアーノ」の客たち	①	
３人の夜更かし者	①	
数人の旅人	①	
下男アンドレア	②	
その他の下男たち	②	
水夫	②	
見張りの男	③	

（丸数字は登場幕）

第１幕（ヌオーヴォ・エジツィアーノ店内）

場末のカフェ。時は夜である。店にはあちこちにテーブルといすがあり，右手にピアノが一台おかれた小舞台がある。夜遅い時間なのに，退店する客，来店する客，注文する者，女をくどく者，踊る者，粗相をする者など怪しげな人物や節度を超えるほど陽気な客たちであふれる店内は，混乱と騒々しさが絶頂に達している（客たちの合唱 Ma il tempo, professore!「ちょっと，テンポがおかしいわ！」３～11）。店主フランツ・カルディッロは赤いトルコ帽をかぶり，忙しそうに接客をしている（フランツのアリア In Egitto, io tenevo「エジプトにいた頃僕は」15～22）。フランツの内縁の妻エミリアはこの店のホステスであり，客の相手をしている。ピアノ弾きヌンツィオは盲目で，日当６リラでこの店に雇われている（ヌンツィオのアリア Io non vedo la luce「私は光の見えない運命の子」44～45）。

騒々しい店内に，素足の乞食パオリーナが物乞いをして歩き回る。慈悲のある女が小銭を与え，店主フランツはパオリーナを退出させる（Un soldo…Non èniente per voi…「小銭一枚でもいいので，旦那様方なら」24～26）。数時間後，パオリーナは警察官ミローネに追われて，再度この店に逃げ込んでくる。ミローネは捜索している二人の悪党盗賊（詐欺師）とパオリーナとの関係を白状させようとする。そして威圧的に盗賊二人の名前を白状させる（Ah! Mi vogliono prendere! Mi voglion bastonare!「ああ，捕まって袋だたきにされるわ！」53～65）。（パオリーナ・ミローネ・フランツ・エミリアの４重唱 Noioso! Sono stanca「もう，うんざり。疲れたわ！」67～73）。ミローネが去り，フランツとエミリアが屋根裏部屋へ上がったあと（フランツとエミリア Andiamo. Dov'hai la testa?「何をぼけっとしている？もう寝よう」81～83），ヌンツィオが現れる。ヌンツィオはパオリーナに悲しみを打ち明けてくれたら，自分も自らのことを話す，悩みごと

を持つ者同士ならば慰め合うことができる，と語りかける。パオリーナは両親に置き去りにされて生きてきた孤独な自らを話る（ヌンツィオとパオリーナの２重唱 Accòstati. Dove sei?「どこにいるの。こっちへおいで」94～112）。

ヌンツィオはパオリーナとこの地を去ることを決意する。二人の心は一つになり，夜の闇に紛れる。

第２幕（ヴァレンツァ公爵邸）

ポシリッポ海岸が見下ろすことのできるヴァレンツァ公爵の屋敷は，厳粛で優雅な感じの建物である。庭園には数体の天使像，松の古木やマロニエの茂みがあり，庭園の向こうには穏やかに輝く海と，羽飾りのような形の煙をたなびかせるベスビオス山が見える。

屋敷の一階には，楕円形のテーブルに16人分の豪華な食事が並んでいる。今日は公爵50歳の誕生日である。

昼食の宴が終わり，客たちが公爵を囲んで座っている。皆は盛り上がっているが，公爵は一緒に楽しんでいる様子を見せながらも，実は体調が思わしくない。

取り巻きの女性の一人ロロッテに，自分が不治の病に冒されていることを知ってしまったと告げる（公爵 Care amiche「いとしき友だちよ」７～14）。ロロッテは元気づけるが，そこで発作が起きて気を失いかける。

そこへしなやかで妖婦的な身のこなしでリヴィアが入ってくる。襟の大きく開いた黒いデコルテに包まれた艶やかな姿は，輝くように美しい。リヴィアは陽気な晩餐会やお酒だけの宴会は嫌いだと言い，威厳たる態度で皆に接する（Io amo d’andare ove「私が好きな場所は」18～19）。魅力的なリヴィアのことをこよなく慕う公爵は，元気を取り戻そうとする（公爵のアリア Lolotte, ah sì! Una raffica「そうだロロッテ，一陣の風くらいで」21～26）夕暮れ間近，公爵が皆を庭園の方に誘う。リヴィアはこっそりと公爵に内緒話をする。

ヌンツィオとパオリーナがこの近くを歩いてやってくる（Nessuno ancor?「まだ誰にも会ってないの？」35～36）。ヌンツィオはヴァイオリンを持ち，もう片方の手をパオリーナの肩にかけている。やがてヌンツィオはヴァイオリンを聴かせようとするが，パオリーナは庭園や屋敷の中を覗くことで頭がいっぱい。そして，言葉では言い表せないほど豪華な屋敷の広間の様子をヌンツィオに説明する（C’è una stanza grande..「大広間があるの」39～42）。鏡と金色だらけの広間が，あなたにも見えたら素晴らしいのにと，無邪気に羨ましがるパオリーナを否定するヌンツィオ（Alla nostra oscura cameretta「僕たちの薄暗い小部屋で」43～44）。そして心の底に隠してきた彼女に対する強い愛情を初めて打ち明ける（Or che per te.. nella’anima ho il Paradiso「僕の魂の中には天国があるから」45～47）。

パオリーナは人目を盗むようにヌンツィオの手に口づけする。やがて夜になり，遠く彼方の海から水夫たちの呼び声が聞こえる。二人は遠い思い出の回想にひたる（ヌンツィオとパオリーナの２重唱 In quella terra, da bimba「子どもの頃，あの国に」50～52）。

客たちが三々五々広間に戻ってくる（Un neo inesplorato？「まだ見つけてないホクロがあるんだって？」55～58）。公爵は孤独で押し黙った様子。ヌンツィオとパオリーナは人目を忍んで明かりのないところに身を寄せる。リヴィアが最後に一人でやってくる。二人を見つけ，とげとげしい態度で追い払う（Chi siete voi？「どなた？」59～64）。公爵はリヴィアに，自分の死後，遺書を探すように告げる。子孫は誰もいないのだから遺産はリヴィアのものになると。しかしその言葉とともにおののきに襲われ，もがき苦しんできた自責の念に興奮する。公爵には娘がいた。遠い昔，僅かな金を渡すと，文句も言わずに消えた女の産んだ子だった（公爵のアリア In un lontano dì io colsi dalla pura verginità「昔，屋敷を訪れた従順な乙女の」74～80）（リヴィアと公爵の２重唱 Cercatela in quell luogo ancor…「もっと探してみたら？」81～91）。しかしリヴィアの情熱的な愛が偽りであると察知した公爵は，あまりのストレスに倒れ，そのまま息をひきとる（Oh, Dio.. Che cosa è questo?!「おお，これは一体何なのだ?!」95～100）

第３幕（平屋のみすぼらしい家）

第１・２幕の冒頭が４分の２拍子の快活な音楽で，音楽開始に伴い僅かな時間で幕が上がるのに対し（SIPARIO），第３幕は４分の４拍子の緩やかな音楽が30小節続き（１～５）。その後幕が上がる。特に後半部分（３～５）は第１幕ヌンツィオのアリア Io non vedo la luce「私は光の見えない運命の子」（44～45）から，（Io spero, e forse Dio m’alterà...「神様がお助け下さるかもしれないから」（45）部分を回想させる音楽が付されている。

ヌンツィオはヴァイオリンをもって，パオリーナに「迷える雀」の歌を教えている。パオリーナの表情は生彩に欠け，悲哀な感じである（No. Prima le palore.「だめだ。先ず歌詞を覚えなくては」６～９）。

ヌンツィオは一人で外出しようとする。そのときコスタンツァ婦人が路地を通る。入り口のところで少し躊躇し，軽く咳をしながら中を覗き込んだ。パオリーナは不安になり一緒に行きたいと頼む。ヌンツィオは返事をせず，手探りでパオリーナの目，額，髪，頬，唇を触り，彼女への思い，自らの決意を語る（ヌンツィオ

のアリア Quando giri pei soldi「小銭をもらいに歩くとき」19〜27)。ヌンツィオは涙を流し，ゆっくりと歩き去る。パオリーナは不動で「迷える雀」を繰り返し歌う。

コスタンツァ婦人が怪しげな男を伴い，パオリーナに近づき囁く。そしてこの貧困と別れ，美しい屋敷で召使いや宝石，ドレスに囲まれた生活ができると言い，パオリーナを連れて行こうとする。豊かな生活を夢見るがしかし，世話になった優しくて不運なヌンツィオを一人残すことはできないと言い張る。コスタンツァは，一緒に来ないとヌンツィオを痛い目に遭わせると脅す（パオリーナとコスタンツァの２重唱 L'uccello che sta in gabbia non canta per amor..「籠の中の鳥は好きで歌うのではなくて」29〜51)。絶望し号泣するパオリーナ（Ho in cor tanta paura...「怖くてたまらないわ」52〜56)。

ヌンツィオは近所の娘の訃報を聞く。不吉な考えがよぎる。それを拭い去るように「迷える雀」を演奏する。できるだけきれいに弾こうと努める。

新しい服に着替えたパオリーナが，まるで幽霊のように戸口に現れる。一瞬立ち止まり，靴を脱ぎ，抜き足差し足で家に入り，聖母像の前の火を消す。目を見開いたままのヌンツィオを見ながら。

パオリーナはこの平屋を後にする。

ヌンツィオはヴァイオリンを弾き続ける。

（＊括弧内の数字は楽譜に記載されている練習番号）

３．MORENDO について

前項で，オペラ全体の流れを概観するとともに，聴かせどころとなるアリアや重唱を確認することが出来た。第１幕にはフランツ，ヌンツィオのアリア，ヌンツィオ・パオリーナの２重唱，フランツ・ミローネ・エミリア・パオリーナの４重唱。第２幕では公爵のアリア２曲，公爵・リヴィアの２重唱，ヌンツィオ・パオリーナの２重唱。第３幕にはヌンツィオのアリア，パオリーナとコスタンツァの２重唱が主なものである。

このオペラの楽譜（ピアノヴォーカルスコア）には多様な強弱，速度変化の指示，及び曲の色彩の変化を助言する発想標語が網羅されている。その中でも morendo は目立って多く，拙稿（2003）で述べた36の歌曲集における morendo の付記についての見解との関連が高いと考え，morendo に対するドナウディの考え方を紐解くために，このオペラ作品において morendo が記載されている箇所をまとめる。

第　１　幕

１）p.23 １段目　パオリーナ登場の直前
Ci dispiace「気の毒だけど」

２）p.37 ４段目　客の一人がヌンツィオに近づき，Cieco nato?「生まれつき盲目なのか？」と尋ねる場面

３）p.41 ３段目　閉店となり最後の客たちが千鳥足で立ち去る場面。ヌンツィオが一人舞台上に残される。

４）p.49 １段目　ヌンツィオのアリアの最終小節
Un Dio di carità!「神様お助け下さい」

５）p.53 ３段目　ヌンツィオはフランツに叱責され，気が抜けて立ちすくむ

６）p.53 ５段目　パオリーナが追われて店にやってくる直前

７）p.68 ３段目　パオリーナはミローネに自白を強要させられる
Un po' d'acqua「お水をちょうだい」

８）p.82 ２段目　ミローネが退店する　かみなりの音

９）p.83 ３段目　同

10）p.89 ２段目　暗闇と沈黙の中，雨が降り始める

11）p.91 １段目　小さくなって座っていたパオリーナが立ちあがる

12）p.92 ２段目　引き続き雨の音が続いている場面

13）p.101 ３段目　雨が降り止み，この後ヌンツィオとパオリーナの出会いとなる

14）p.108 ３段目　ヌンツィオ・パオリーナ２重唱
resta anch'egli per un momento in silenzio, come accarezzando un suo sogno improvviso（突然の願望をいとおしむように，暫く沈黙する）

15）p.109 １段目　同
Or parlami di te. Dim mi che sai.
「さあ今度は君のことを話しておく

れ。君が知ってることを」

16）p.111 ３段目　同
パオリーナが自らのことを語り終えたところ

17）p.113 １段目　同
E che rispondi?　Andiamo.
「一緒にくるかい？」「ええ，行くわ」

18）p.114 ２段目　同
Vivremo raminghi e felici..Lontano..
「さすらいながら幸せに暮らそう」

19）p.116 ２段目　同　最終小節

20）p.119 ３段目　２人が店を出る
暗闇の中，お互いを探し合う

21）p.122 ３段目　第１幕の終わり　SIPARIO

第　２　幕

22）p.135 ４段目　公爵は鏡に映る姿を見て愕然とする Diverrò l’ombra mia!「自分の影になってしまいそうだ」

23）p.137 １段目　公爵は発作に襲われ気を失う

24）p.137 ３段目　ロロッテの慰めにも関わらず悲しそうに首を振る。Ah, no! non dite questo.
「いや，そんなことはいわないで」

25）p.149 １段目　公爵のアリア
Com’essa bevve alle mie vene!
「私の血を吸い上げたように」

26）p.152 １段目　同
再び気を失いかけ，発作的に笑う

27）p.161 ２段目　客たちが屋敷の外へ移動したため中庭は空っぽとなる。物音一つしない夕暮れ。舞台上に誰もいなくなる

28）p.164 ３段目　ヌンツィオとパオリーナが屋敷近くに登場する
Ebbene.. Dove sei? Qui vicino.
「どこにいるの」「すぐ近くよ」
（片手を伸ばして探すヌンツィオだが，あちこち見ながらヌンツィオには近づきもせず，いい加減に答える）

29）p.171 ４段目　屋敷に夢中のパオリーナに対して
E di’「話しておくれ」

30）p.181 ２段目　夜になり，水夫達の最後の呼び声が聞こえ，辺りは深い静寂に包まれる

31）p.186 ３段目　ヌンツィオとパオリーナ２重唱の終わり

32）p.197 ２段目　リヴィアに追い払われた２人がゆっくりと屋敷から出て行く。月明かり一つない闇夜。

33）p.201 ２段目　公爵がリヴィアに遺産の話をする（ト書き rifacedosi cupo と書かれた小節）

34）p.207 １段目　公爵のアリア questa bambina è vostra「この赤ん坊はあなた様の子です」

35）p.225 ４段目　公爵が息を引き取る

第　３　幕

36）p.229 ４段目　第３幕冒頭音楽の終わり

37）p.243 ３段目　ヌンツィオのアリア
（手探りでパオリーナを探し，目，額，髪，頬，唇を触る）

38）p.246 ４段目　同
Così smorza quell lume alla Madonna「聖母像の蝋燭を吹き消しておくれ」

39）p.248 ４段目　同　最終小節

40）p.271 ２段目　コスタンツァに強要されたパオリーナが，泣きながらヌンツィオのも

とを離れる決心をする場面

41）p.271 3段目　同　　最終小節

42）p.273 2段目　Perdonami!...
「ヌンツィオ，堪忍してね」

43）p.275 2段目　Paolina tua qui non ritorna più!
「あなたのパオリーナはもうここには戻ってこないのよ」

44）p.285 3段目　パオリーナの不在に不安をよぎらせるヌンツィオ
Mah! Lavoriamo…「さてと，仕事でもするか」

45）p.286 3段目　オペラの終わりの場面
46）p.286 4段目　戸口にコスタンツァからもらった新しい服に着替えたパオリーナが，まるで幽霊のように現れる。直立したまま，敷居のところで一瞬立ち止まる。そこで靴を脱ぎ，抜き足差し足で家に入り，聖母像の前のランプの火を消す。そして，目を見開いたままのヌンツィオを見ながら，後ずさりでそっと立ち去る。敷居のところまで行くと，靴を履いて逃げる。その間，ヌンツィオはヴァイオリンを弾き続ける

以上，morendo の出現箇所を列記し，場面説明を加えた。第１幕では21，第２幕では14，第３幕では11，計46の morendo があったが，出現箇所には偏りがあると思われる。46箇所のうち，34箇所の morendo はヌンツィオとパオリーナに関わる場面，そして８箇所が公爵に関わる場面に付されている。残りの４箇所のうち，８），９），10）は第１幕でミローネが退店し，閉店したフランツとエミリアが２階の寝室へ行く場面である。この時，風が吹き出し，稲妻が光り，遠くから雷鳴の音が聞こえてくる。更に周囲は暗闇と静けさの中，雨が降り始める。そして土砂降りとなるが次第に弱まり，やがて完全に雨は止む。このオペラの楽譜 P.81～101には，前述した天候の変化を楽譜上にト書きとして記している。興味深いことは，雷鳴（tuono lontano）とト書きが付されている箇所に８）と９）の morendo がある。更に，「暗闇と沈黙。雨が降り始め，風が不気味な音を立てる」：Buio e silenzio. Incomincia a piovere e il vento fischia sinistramente というト書きが付されている箇所に10）の morendo が付されている。27）の morendo の箇所は，第２幕で屋敷の客が庭園への階段を下りて行く場面で，「中庭は空っぽで静寂となり，あたりは夕暮れとなる」：La spianata è adesso vuota e silenziosa. Comincia a imbrunire というト書きが付されている場面である。

上述した箇所は，直接ヌンツィオ，パオリーナに関わる場面ではないように思われたが，暗闇と静寂という共通点がある。前者は雨が降り止んだ後，初めて二人が出会い，会話をする場面が続き，後者は第２幕で初めて二人が登場する場面が続く。従って８），９），10），27）の箇所もヌンツィオ，パオリーナに関わると分類づけることができると思われる。

更にこのオペラのテキストにおいて，パオリーナが公爵の実の娘であると想像させられる箇所がいくつかある。この想定であれば，34）公爵のアリア questa bambina è vostra「この赤ん坊はあなた様の子です」の部分に付された morendo は，意味深長にパオリーナを暗示しているようで興味深い。

述べてきたように morendo はこのオペラの主人公ヌンツィオとパオリーナの生き様，そして公爵の運命を描く箇所に偏って頻繁に現れた。更にその中でも，暗闇と静寂というキーワードに反応して現れているように感じられる。

音楽用語としての morendo は，速さを示す用語と記号のなかの，「速さと強さの変化を示すもの」に位置づけられている[6]。

allargando	強くしながらだんだん遅く
calando	弱くしながらだんだん遅く
morendo	〃
perdendosi	〃
smorzando	〃

morendo と，calando，perdendosi，smorzando は同義語として扱われ，ドナウディの作品にも多く使われている。この４つの言葉の原型となる動詞は calare：下ろす，下げる，減らす（英 lower/drop），morire：死ぬ，終わる，（光などが）絶える（英 die），perdere：消える，なくなる，失う（英 lose），smorzare：和らげる，ぼんやりさせる，（音量を）弱める（英 dim/soften/reduce）というように異なるニュアンスを持つ[7]。

morendo（morire）は，究極的に命（anima）の介在を意識させられる点において，他の３つの語に比べ

て特徴的であろう。従って作曲家は楽譜上でこの言葉を使用することに幾分慎重になるということも考えられる。実際に G. プッチーニ（1958-1924）の主な作品において，morendo の付された箇所を紹介する。

La Boheme（1896）
p.133　felice mi fa!　（Musetta）
p.273　Qui amor.. sempre con te　（Mimi）

Tosca（1900）
p.242　Vissi d’arte　（Tosca）
p.314　a sol cadente, nuvole leggere!　（Tosca）
[rimangono commossi, silenziosi]

Madama Butterfly（1904）
p.340　Non c’è!..　（Butterfly）
[vede Kate nel giardino]

Il tabarro（1918）
p.63　（Frugola）
p.110　（Michele）

Gianni Schicchi（1918）
p.335　Chi può essere? Ah!（Gianni Schicchi）

このようにプッチーニは極めて印象的に morendo を付している。また同時代の他作曲家の代表的な作品を概観した。

P. Mascagni	Cavalleria rusticana（1890）
R. Leoncavallo	Pagliacci（1892）
U. Giordano	Andrea Chénier（1896）
F. Cilèa	Adriana Lecouvreur（1902）

この４作品に morendo の記載は一切ない。非常に興味深く，今後多くの作品を調査してみたいと考える。

述べてきたように，Donaudy の morendo という用語に対する価値観は独特のものであったと思われる。速さと強さの変化を示す用語としての役割はもとより，その範疇を越えて，弟 Alberto の手がけたテキストの内容に踏み込んだものとなっていると考える。

５．おわりに

本稿では S. Donaudy のオペラ第４作“SPERDUTI NEL BUIO”のテキスト及び音楽を概観した。今回の考察による morendo の多さと偏った使われ方は，他のドナウディのオペラ作品を概観することによって更に明らかになると考える。また他の作曲家が慎重に用いたとも考えられる morendo の箇所を演奏する場合，格別の意識を備えるべきであろう。

【注・引用文献】

１）枝川一也　S.Donaudy“36 Arie di stile antico”研究Ⅱ ～声楽教育の視点から～　広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部第52号　pp.325-333　2003

２）枝川一也　S.Donaudy“36 Arie di stile antico”研究Ⅰ ～声楽教育の視点から～　広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部第50号　pp.351-358　2001

３）DONAUDY　36 ARIE DI STILE ANTICO　全音楽譜出版社　1977

４）DONAUDY　36 ARIE DI STILE ANTICO High voice　RICORDI 1998　p.2

５）枝川一也　S.Donaudy“36 Arie di stile antico”研究Ⅲ ～オペラ作品との関わりを視点として～　広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部第56号　pp.323-327　2007

６）文部省編　教育用音楽用語　日本教育新聞社　1998 p.22

７）Concise Oxford PARAVIA ITARIAN Dictionary Itarian － English　2003

【参考資料・楽譜】

DONAUDY, Stefano
Opera Completa per Canto e Pianoforte SPERDUTI NEL BUIO　G. RICORDI & Co.　1906

DONAUDY　36 ARIE DI STILE ANTICO　全音楽譜出版社　1977

DONAUDY　36 ARIE DI STILE ANTICO High voice　RICORDI　1998

PUCCINI, Giacomo　La Bohème　RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES　2001

PUCCINI, Giacomo　Madama Butterfly　RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES　2001

PUCCINI, Giacomo　Tosca　RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES　1985

PUCCINI, Giacomo　Il Trittico　RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES　2002

MASCAGNI, Pietro　Cavalleria Rusticana　CASA MUSICALE SONZOGNO　1984

LEONCAVALLO, Ruggero　Pagliacci　CASA MUSICALE SONZOGNO　1984

GIORDANO, Unberto　Andrea Chénier　CASA MUSICALE SONZOGNO　1972
CILÈA, Francesco　Adriana Lecouvreur　CASA MUSICALE SONZOGNO　1903
ウィーヴァー，ウィリアム　大平光雄訳
イタリアオペラの黄金時代　音楽之友社　1998